

Japanese Graded Readers

レベル別
日本語多読
ライブラリー



にほんご よむ よむ 文庫

レベル **3** vol.3 **11**

しあわ おう じ
幸せな王子

～ The Happy Prince ～



原作 = オスカー・ワ

簡約 = 栗野 真紀子

挿絵 = エアー・ダイブ

監修 = NPO法人日本語多読研究会

にほんご よむよむ文庫 レベル 3

しあわ おう じ
幸せな王子
～ *The Happy Prince* ～



原作（げんさく）：オスカー・ワイルド（おすかー・わいるど）

簡約（かんやく）：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ）：エアーダイト（えあーだいぶ）

監修（かんしゅう）：NPO法人日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

<監修者紹介>

NPO 法人 日本語多読研究会 (にほんご たどく けんきゅうかい)

とうけんきゅうかい がくしゅうしのかいほう つく もくてき にほんごきょうし
当研究会は、学習者のための「読みもの」を作ることを目的に、日本語教師が
あつ 集まって、2002年1月に発足しました。2006年9月にNPO法人になりました。
「レベル別読みもの」を開発したり、それらを使った「多読」の授業の実践・研
究をしたりしています。http://www.nihongo-yomu.jp

レベル別日本語多読ライブラリー (にほんご よむよむ文庫)

[レベル3] vol.3

幸せな王子 ~ The Happy Prince ~

2009年4月27日 初版 第1刷 発行

原作：オスカー・ワイルド (Oscar Wilde)

簡約：栗野 真紀子 (日本語多読研究会会員・日本語教師)

作画：エアードライブ

監修：NPO 法人 日本語多読研究会

ナレーション：山中 いっとく / 小金澤 篤子

録音・編集：スタジオグラッド

デザイン・DTP：仙台 忍

発行人：天谷 修平

発 行：株式会社アスク出版

〒162-8558 東京都新宿区下宮比町 2-6

TEL.03-3267-6864 FAX.03-3267-6867

http://www.ask-digital.co.jp

http://www.ask-digital.co.jp/tadoku (「にほんご よむよむ文庫」公式サイト)

印刷・製本：株式会社光邦

許可なしに転載・複製することを禁じます。

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

©NPO 法人日本語多読研究会 2009

Printed in Japan ISBN978-4-87217-703-9

日本語を勉強しているみなさんへ

「にほんごよむよむ文庫」は、

日本語を勉強しているみなさんのための「読みもの」シリーズです。

楽しみながらたくさん読んでください。

やさしいものからたくさん読むと、知らないうちに漢字の読み方や言葉が身につきます。
読んだ話をCDでも聴いてみてください。読みながら聴いてもいいでしょう。

目からも耳からもどんどん日本語を吸収しましょう！

「にほんごよむよむ文庫」4つのルール

- 1 やさしいレベルから読む。
- 2 辞書を引かないで読む。
- 3 わからないところは飛ばして読む。
- 4 進まなくなったら、他の本を読む。

にほんご よむよむ文庫 レベル 3

しあわ お う じ
幸せな王子
～ *The Happy Prince* ～

原作（げんさく）：オスカー・ワイルド（おすかー・わいるど）

簡約（かんやく） ：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ） ：エアーダイト（えあーだいぶ）

監修（かんしゅう） ：NPO法人日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

ある町に、「幸せな王子」の像がありました。

王子の像は、高い台の上に立っていました。体は金色です。目はきれいな青です。
サファイアという宝石です。剣には、赤い宝石、ルビーがついていました。

町の人はみんな、

このピカピカ光るきれいな

「幸せな王子」が大好きでした。

いつも、この「幸せな王子」

を見ながら、幸せな気持ちに

なるのでした。



ある日の夕方、この町に、つばめが飛
んできました。つばめは、寒いところでは
暮らせません。だんだん寒くなってきた
ので、これから、暖かい南の国へ行く
のです。

—— 寒いな。暗くなってきた。どこか寝
るところはないかな ——

つばめがそう思いながら飛んでいると、
幸せな王子の像が見えました。

「あ、あそこがいい！あそこで寝よう」





つばめは、幸せな王子の足のところに
下りました。

——ここは、遠くがよく見えるし、
静かだ。よく眠れそうだ——

つばめが眠ろうとすると、水が

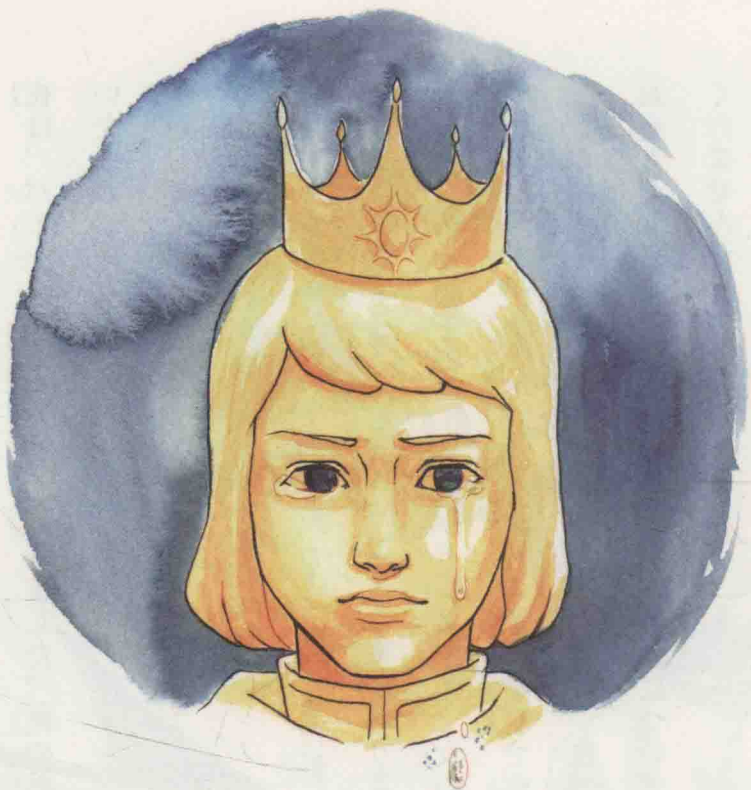
「ポツン」と一滴、上から落ちてきました。

「冷たい！雨かな？」

でも、空には雲ひとつありません。

星がきれいに光っています。





—— 変^{へん}だな？ ——

つばめがそう思^{おも}って上^{うへ}を見^みると、

幸^{しあわ}せな王^{おう}子^じが泣^ないているのでした。

雨^{あめ}だと思^{おも}ったのは、王^{おう}子^じの涙^{なみだ}でした。

つばめは聞^ききました。

「あなたは、どなたですか？」

「私^{わたし}は、幸^{しあわ}せな王^{おう}子^じです」

「幸^{しあわ}せな王^{おう}子^じが、

どうして泣^ないているのですか？」

「私は生きているとき、大きな城に住んでいました。昼は、大きな庭で友だちと遊んで、夜は、パーティーで友だちと踊りました。城の外のこととは、何も知りませんでした。泣いたことは一度もありません。とても幸せでした。だから、みんな、私を『幸せな王子』と呼びました。でも、死んで、ここに来てからは、毎日悲しいのです。ここから、町の中の悲しいことが、全部見えるからです」

つばめが静かに聞いてみると、王子は、また低い声で言いました。

「ここからずっと遠くのほうに、小さな家があります。女の子が、ドレスを作っています。お金持ちの女の子のパーティードレスです。女の子は、とても疲れているようです。窓の下にベッドがあつて、小さな男の子が病気で寝ています。その子は、おながすいたと言つて泣いています。でも、女の子には、食べ物を買うお金がありません。薬を買うお金もあります。つばめさん、私の剣についているルビーを、あの家に持つていってくれませんか？」



つばめは言いました。

「ごめんなさい、王子様。

私は男の子が好きじゃないんです。

去年の夏、川のそばを飛んでいたら、

二人の男の子が、私に石を投げたんですよ」

でも、王子がとても悲しそうな顔を

したので、つばめは言いました。

「わかりました。持っていきますよ」

「ありがとう、つばめさん」

つばめは、王子の剣から大きな赤いルビーを

取り出すと、それを持って、飛んでいきました。





つばめは、川の上を飛んで、
 女の人の家に着きました。窓か
 ら中を見ると、男の子はベッ
 ドで寝ていました。女の人も、疲
 れてベッドの横で寝ていまし
 た。つばめは、テーブルの上
 に静かにルビーを置きました。

それから、つばめは王子のところに帰ってきました。そして言いました。

「こんなに寒い夜なのに、今、私の心はとても温かい。どうしてでしょう?」

「それは、いいことをしたからですよ」

王子は言いました。

次の日の夕方、つばめは王子に言いました。

「私は、これから暖かい南の国へ行きます。王子様、さようなら」

すると、王子は言いました。

「つばめさん、小さなつばめさん。私のために、もう一晚、ここにいてくれませんか?」

つばめは、驚いて言いました。

「え、どうしてですか? 私の友だちは、みんな暖かい国へ行ってしまった。私も、早く行かなければなりません」

しかし、王子は言いました。